

言葉と歩く、光村の教育情報誌

とことば

創刊記念

0号

tokotoba

特集

わたしたちと言葉

500人アンケート

「いまの時代と言葉」って？

これからの時代と言葉

蜂飼 耳 (詩人・作家)

加賀田 哲也 (大阪教育大学教授)

光村図書の編集長が語る

教科書づくりと言葉



光村図書

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた
「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

『とことば』
始まります。

教室の中と外の世界をつなぐ今日的なテーマを
言葉を切り口に追いかける教育情報誌です。

言葉のもつさまざまな側面を切り取りながら、先生方といっしょに、子どもたちに、言葉のもつ可能性や豊かな世界に出会わせる方法を考えていきたいと思います。

子どもたちは、これからたくさんの言葉に出会い、
ともに生きていきます。

みんながよりよく生きていけるように、
言葉を見つめて、とことこ歩きながら、
言葉っていいな、おもしろいな、
いろいろな可能性をもっているな。

そんなことを感じてもらえる冊子を目ざします。



創刊に込める思い

教科書とは、小さな窓のようなものだと、
常々思ってきました。限られたページの中に、
生きていくうえで大事なことや、知っておく
べき知識のすべてを詰め込めるわけではあり
ません。けれど、その1ページ1ページに、
子どもたちが向こう側をのぞいてみたくなる
ようなきっかけを設けておくことはできる。
気持ちが進んで、もっと知りたい、やってみ
たいと思ってもらえる材料になることはでき
る。そう信じて、この仕事を続けてきました。

今日、その窓の外の社会には、さまざまなテーマが立ち現れています。生成AI、多様性、共生社会……。言葉にすると深刻に捉えてし

まいそうになるそれらの問題も、実は教育と同じで、「こうしていかななくてはならない」という決められた正解はないのだと思います。子どもの周りにいる、先生方、保護者、研究者、そして私たちを含めた大人が、時に連携し、時にそれぞれの立場から、子どもといっしょに考え、答えをつくってあげればいい。もしかすると、何もかもが新しいことではなく、子どもたちが教科の中ですでに向き合ってきたことと地続きなのだと思うものもあるでしょう。

避けては通れないテーマだからこそ、あくまで楽しく、けれど奥深く。新しい教育情報



光村図書出版株式会社
代表取締役社長
吉田直樹

誌では、「そんなふうを考えてもいいのか」と思えるような切り口をお届けしていきたいと思います。時代が変わっても、子どものことを考え、子どもとともに過ごし、子どもの成長を見守ることが、私たち大人にとって、楽しく幸せな時間だということは変わりません。子どもたちこそが、唯一ある私たちの未来なのですから。



創刊記念 **0** 号

特集

わたしたちと言葉

これからさまざまな「〇〇と言葉」のテーマを探っていくうえで、
まずは、わたしたちが感じている「言葉」について見つめていきます。

世の中の人々がもつ言葉のイメージ、光村図書が教科書づくりの中で大切にしている言葉。
慌ただしく過ぎていく毎日ですが、ちょっと立ち止まって、
自分にとっての言葉とは何かを問い直すきっかけにいただければと思います。

CONTENTS

500人アンケート
「いまの時代と言葉」って？ 04

言葉の中の、自分を見つめて。蜂飼 耳(詩人・作家)————— 08

言葉で子どもたちの心をつなごう。加賀田 哲也(大阪教育大学教授)———— 09

光村図書の編集長が語る
教科書づくりと言葉 10



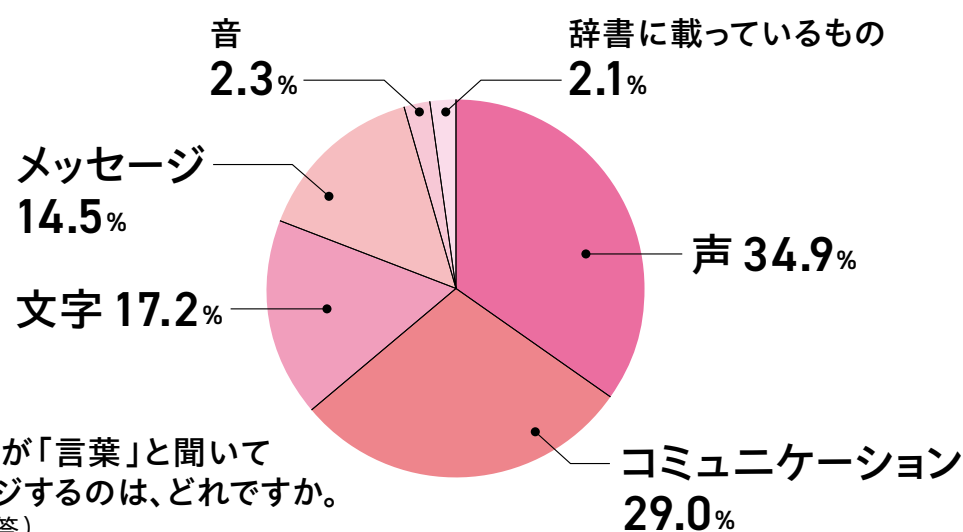
500人アンケート 「いまの時代と言葉」って？

言葉って？

言葉には、
“他者の存在”を感じさせる
イメージがある。
言葉がより活躍するのは、
誰かとコミュニケーションを取ったり、
誰かとつながったりする場面。

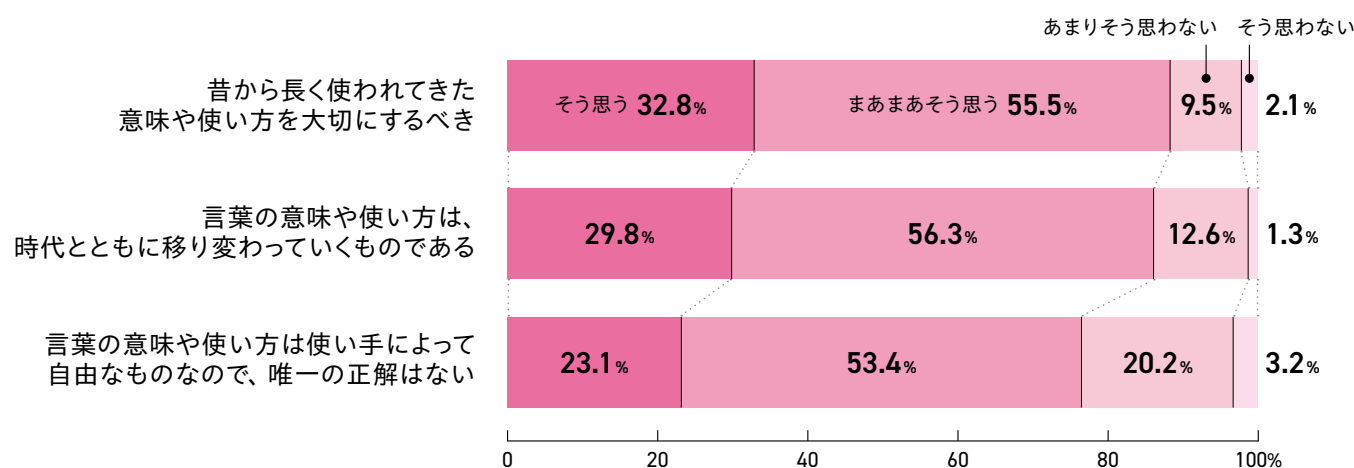
Q.1

あなたが「言葉」と聞いて
イメージするのは、どれですか。
(単一回答)



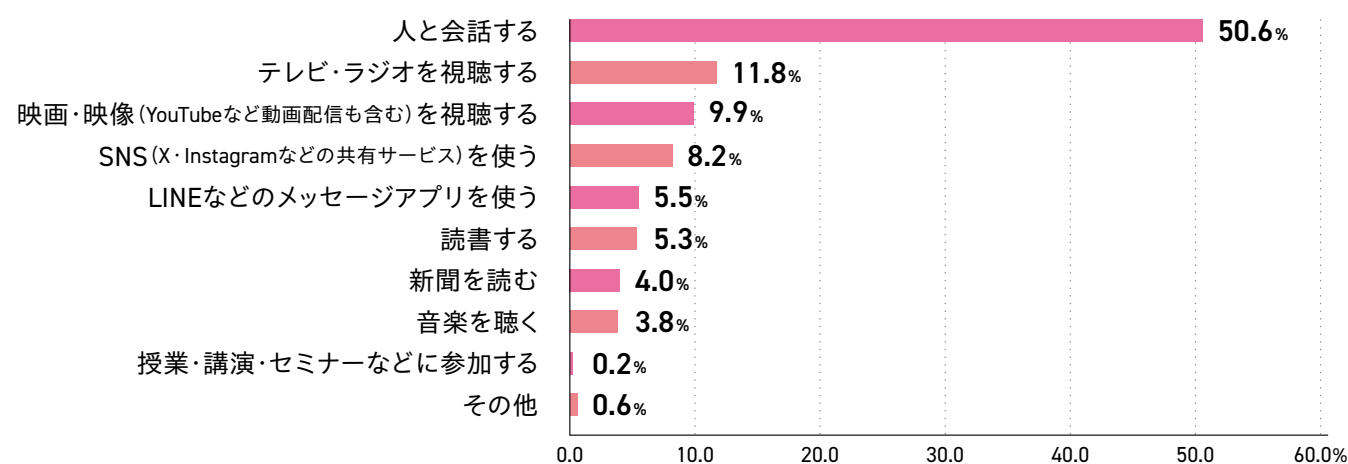
Q.2

言葉の意味や
使い方について
どのように
思いますか。
(単一回答)



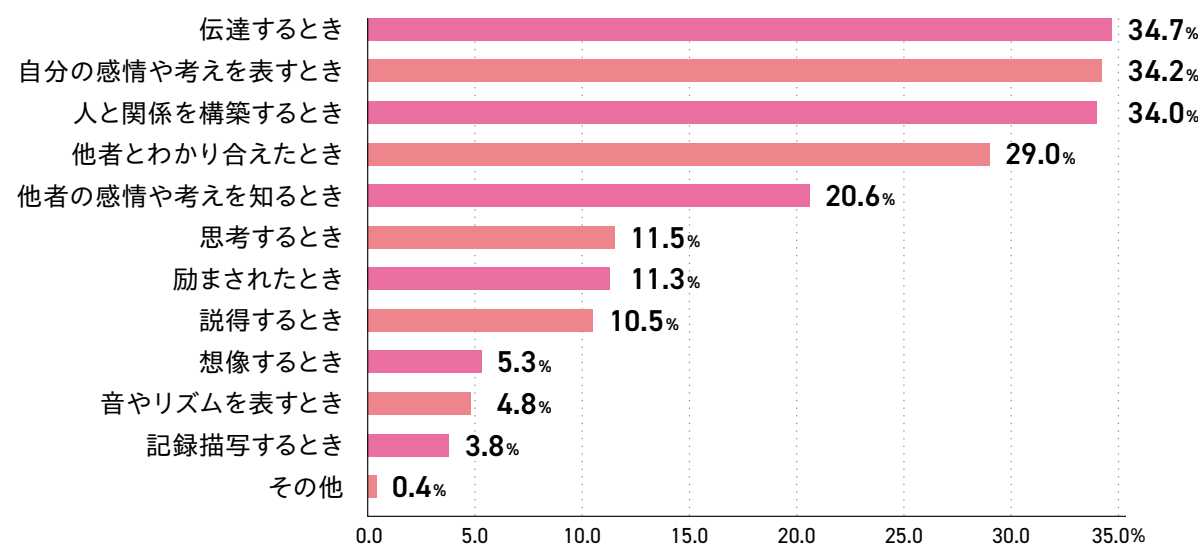
Q.3

日常生活で
あなたが
言葉に触れる
場面のうち、
いちばん多いのは
どれですか。
(単一回答)



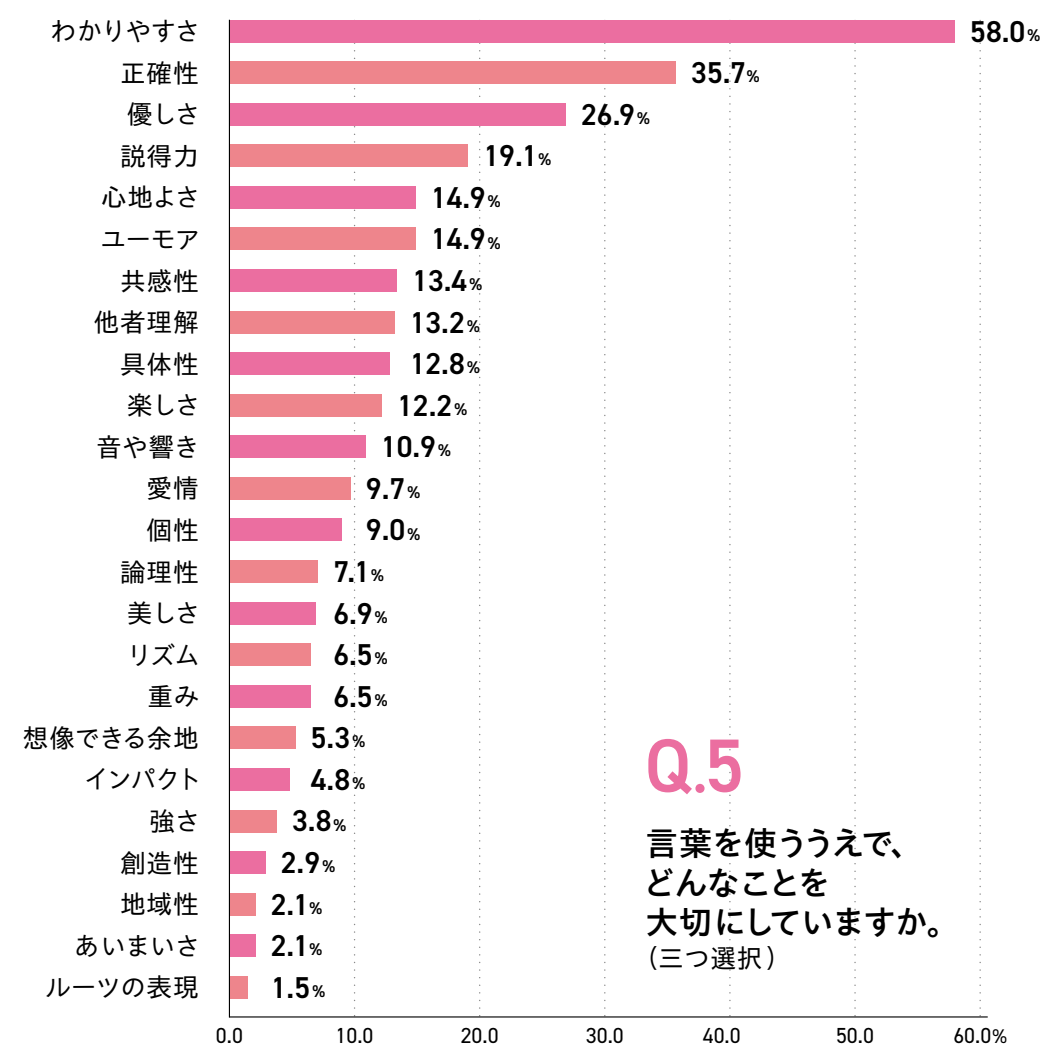
Q.4

言葉があって
よかったと感じるのは、
どんなときですか。
(二つ選択)



話し言葉に書き言葉、点字、手話、ボディランゲージ……。
言葉にはさまざまあるけれど、どれも、わたしたちが暮らし、
誰かとともに生きるうえで欠かせないものです。
全国500人へのアンケート調査を通して、時代とともに変わりゆく言葉のいまの姿、
言葉と人との関わり方を探ってみました。

〔調査の概要〕
●調査名：
「言葉」についての意識調査 (自社調べ)
●調査方法：インターネット調査
●調査対象者：
国内に住む20～70代の人々
●有効回答数：524名
●調査実施期間：
2025年1月17日～1月18日

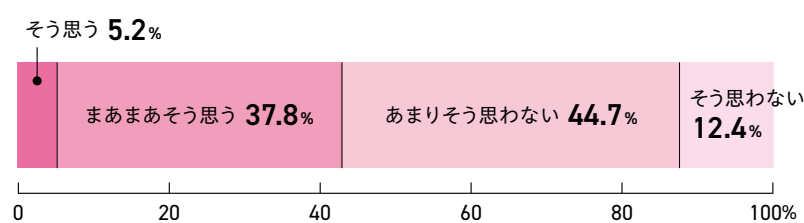


Q.5

言葉を使ううえで、
どんなことを
大切にしていますか。
(三つ選択)

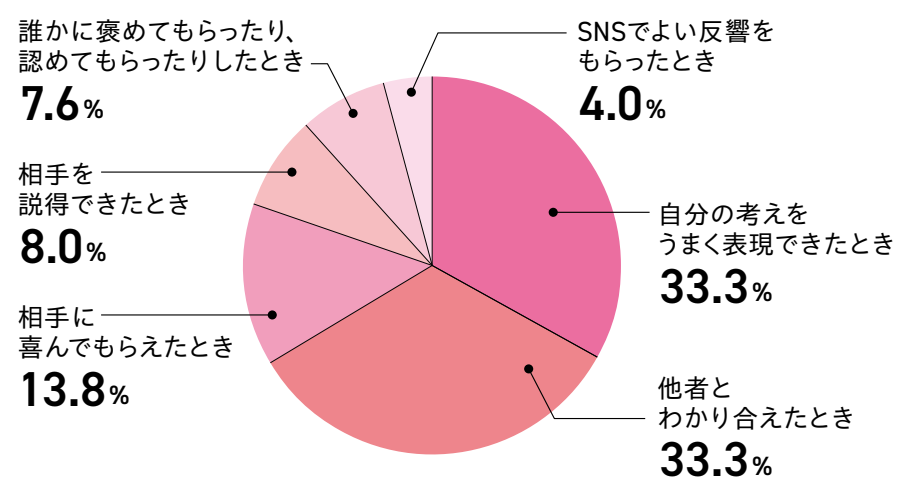
Q.7

あなたは、自分が言葉を使いこなせていると
思いますか。(単一回答)



Q.8

Q.7で「そう思う」「まあまあそう思う」と答えた方は、
どんなときにもっともそう思いますか。(単一回答)

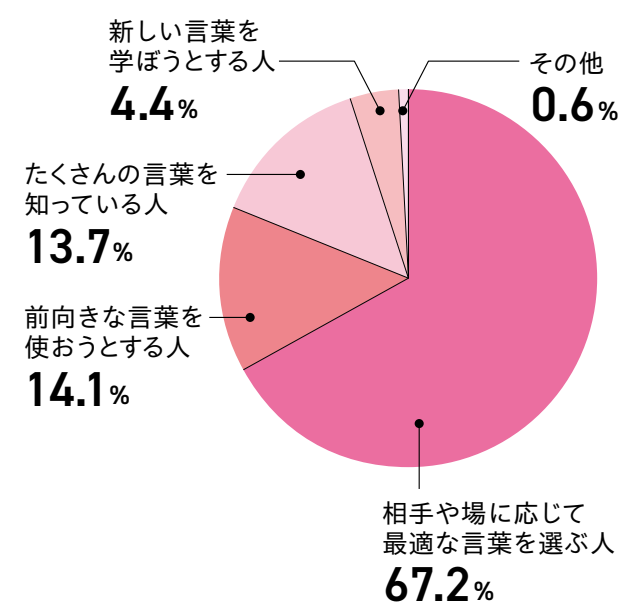


言葉、どう使う？

技術が進歩しても、
言葉はずっと必要であり続ける。
自分が「言葉を使いこなせている」
と思えるのは、
言葉を使って他者との関係を
よりよくできたと実感できたとき。

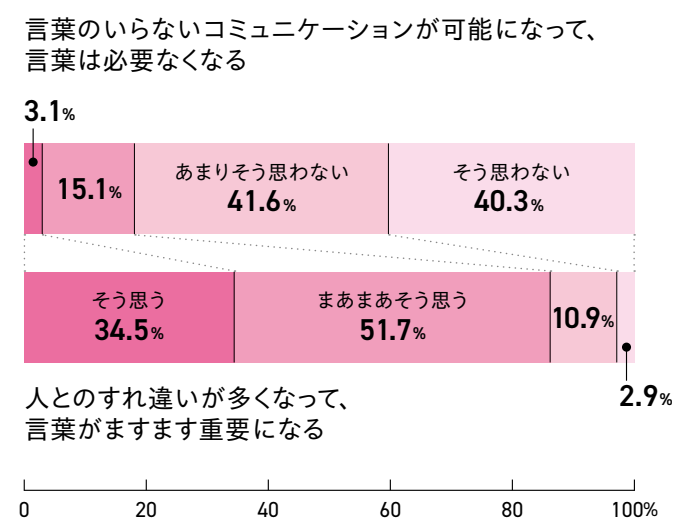
Q.6

あなたが「言葉を大切にしているな」と
思うのは、どんな人ですか。(単一回答)



Q.9

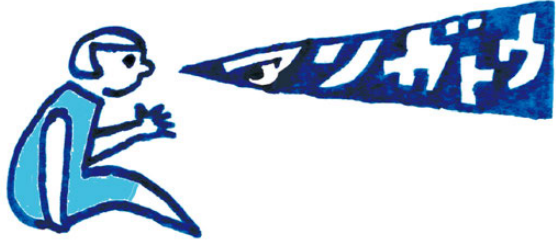
AIやテクノロジーの進歩によって、
言葉はこれからどうなっていくと思いますか。
(単一回答)





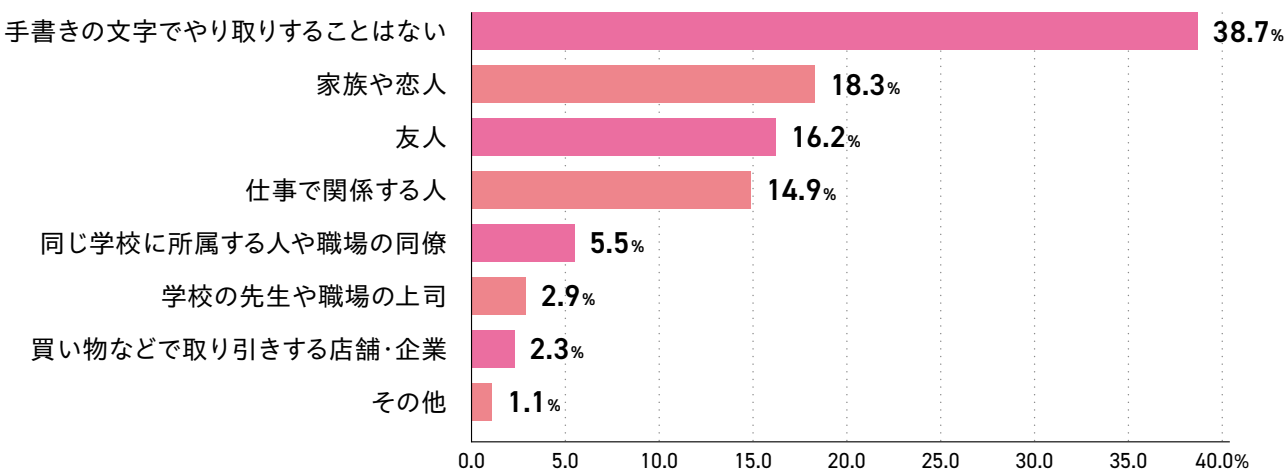
言葉とコミュニケーション

家族や恋人、友人、仕事で関係する人は、交流手段にかかわらずやり取りが多い。
手書き文字、打った文字、声だけ、顔を見ての交流のうち、
手書き文字は、今、もっとも使われることが少なくなっている。



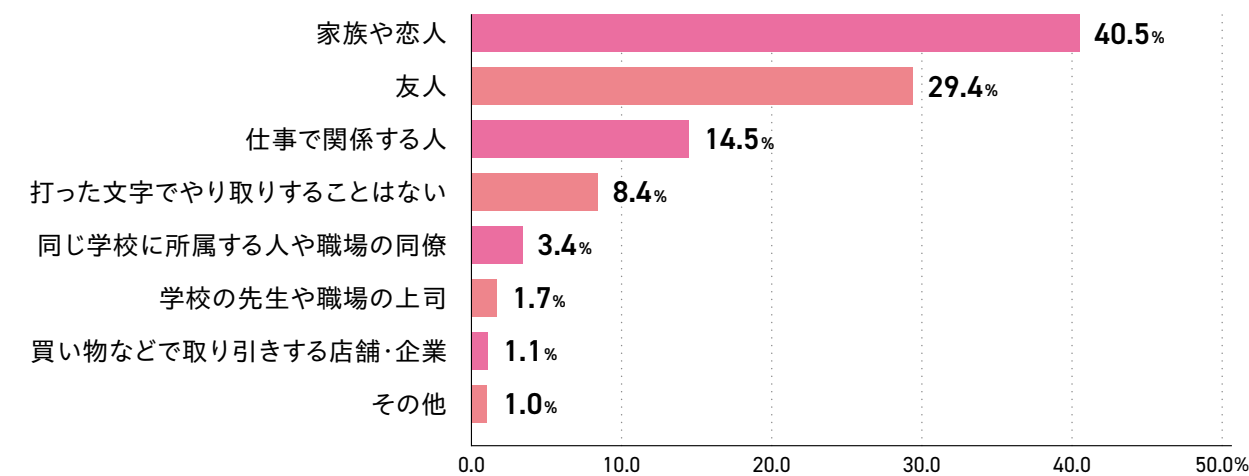
Q.10

今、あなたが、
手紙など、
手書きの文字で
やり取りすることが
もっとも多いのは、
どんな相手ですか。
(単一回答)



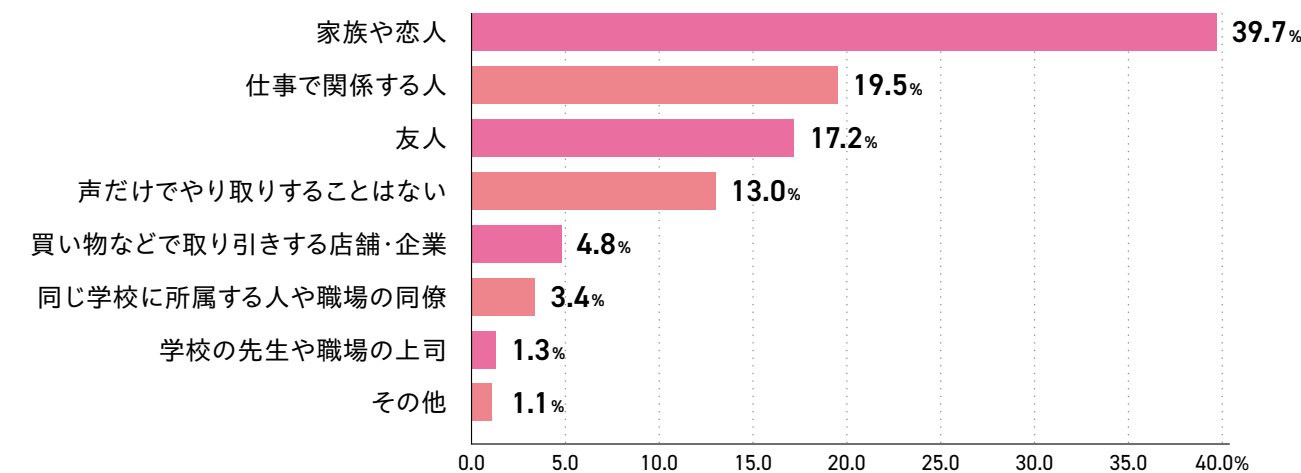
Q.11

今、あなたが、
メールやSNSなど、
打った文字で
やり取りすることが
もっとも多いのは、
どんな相手ですか。
(単一回答)



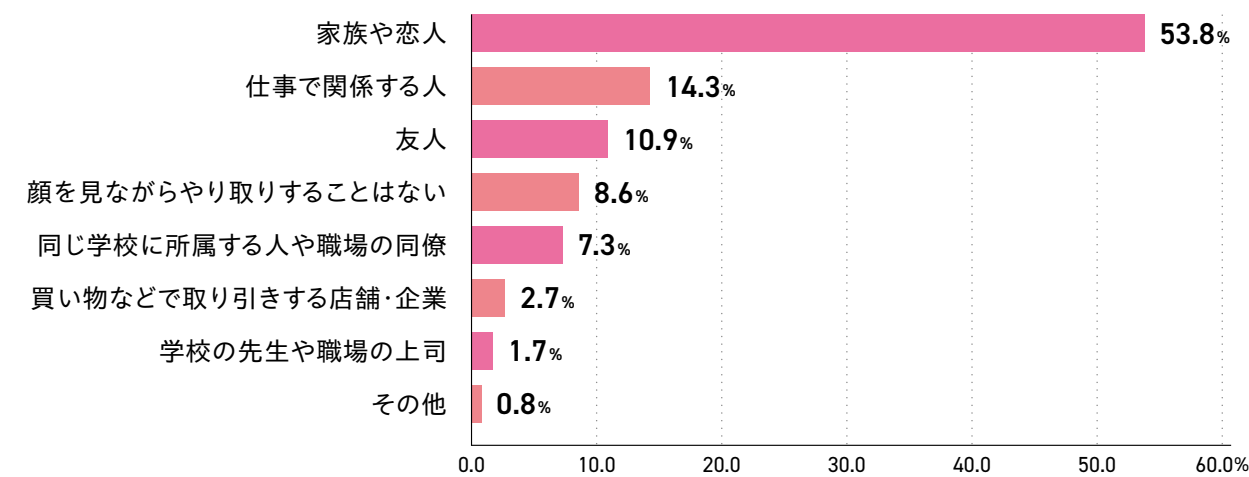
Q.12

今、あなたが、
電話など、顔を見ずに
自分の声だけで
やり取りすることが
もっとも多いのは、
どんな相手ですか。
(単一回答)



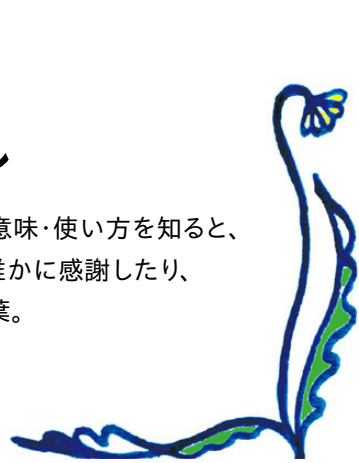
Q.13

今、あなたが、
顔を見ながらやり取りする
(対面もオンラインも含む)
ことがもっとも多いのは、
どんな相手ですか。
(単一回答)



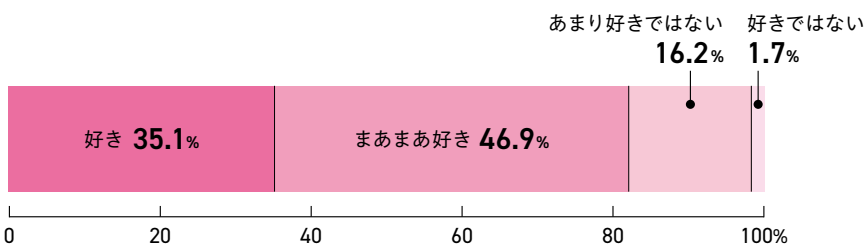
言葉とわたし

言葉を使うことは、好き。捉え方の違い、新しい意味・使い方を知ると、
言葉って面白い。大切にしているのは、誰かに感謝したり、
誰かのことを思ったりする言葉。



Q.14

「言葉」を使うことは好きですか。
(単一回答)



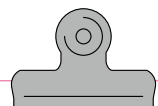
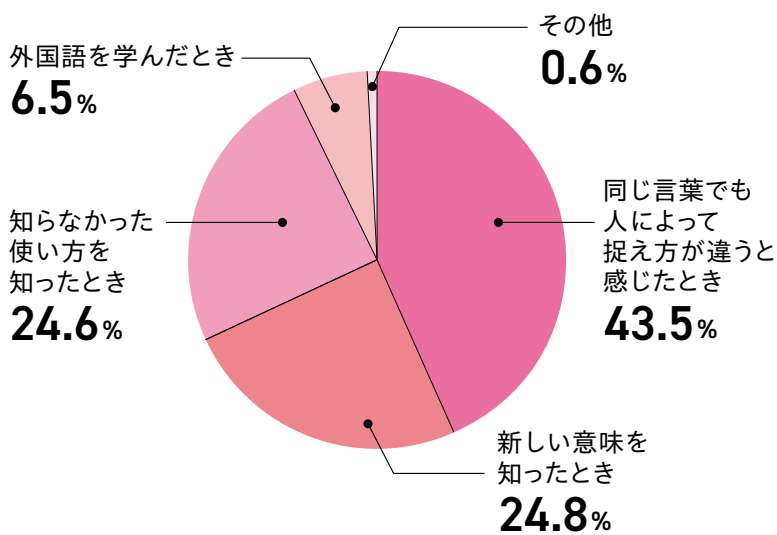
Q.16

あなたが、長い間、ずっと大切にしている言葉、
忘れられない言葉を一つ、教えてください。
(自由記述)

順位	言葉	人数
1	ありがとう	84人
2	感謝	12人
	思いやり	12人
3	一期一会	7人
4	努力は裏切らない	6人
5	継続は力なり	5人
	誠実	5人
6	信頼	4人
	優しさ	4人
	なんとかなる	4人
7	人間万事塞翁が馬	3人
	失敗は成功のもと	3人
	急がば回れ	3人

Q.15

あなたが「言葉って、おもしろいな」と思うのは、
どんなときですか。(単一回答)



この他にも、
回答者数が1~2人のものも含めると、
全部で200を超える数の言葉が集まりました。
なかでも特徴的だったのは、
次のような言葉です。

● 言葉やその使い方に関する言葉

「言葉」「言葉にしないと伝わらない」
「言葉は自分に返ってくる」
「心を込めた言葉は必ず相手に伝わる」など。

● 生きるうえでの行動指針となるような言葉

「初心忘るべからず」
「人間は一人では生きられない」
「花よりも花を咲かせる土になれ」など。

● 前向きになれるような言葉

「冬は必ず春となる」
「暗闇があるからこそ星が輝いて見える」
「越えられない試練は与えられない」など。

あなたにとって、「言葉」って何ですか？ この機会に、ちょっと振り返ってみてはいかがでしょうか。

言葉の中の、自分を見つめて。

蜂飼 耳
HACHIKAI Mimi
詩人・作家

まだ、言葉に出会ったばかりのころ、一音一音の組み合わせが意味をなすこと、それらが連なり物語になること、そのすべてがとてもおもしろくて、夢中になった記憶があります。一語一語、体感する際の新鮮な異物感とでも呼ぶべきものを確かめるようにしながら、幼いころの私は少しずつ言葉を増やし、知覚できる世界、認識できる世界を増やしていった気がします。私にとって、言葉は人生そのものの。生きていくことそのものです。

人類の歴史上、おびただしい数の人間が関わりながら築かれてきたのが「言葉」。人間はいつも、言葉の中に自分たちの存在を蓄積してきました。かけがえのない、大切な言葉ですが、その中に「恐ろしさ」も含まれているという事実から、目をそむけてはいけなと思っています。流れる情報を浴びるように見聞きして、瞬間的に反応することが当たり前となっている現代社会ですが、言葉を使うことへの謙虚さが必要だと思います。分断の

時代と言われる状況が生じる要因の一つとして、言葉が人と人との切り離すような、不用意で暴力的な使われ方をしている点があげられるでしょう。現代の言葉を捉えようとするとき、そうした観点は外せないと思います。

言葉には人を生き生きとさせる要素が、必ずあるのです。言葉は、それを通して人間をとりまく情感や思考の奥深さ、幅広さを体感させてくれ、心を育ててくれます。今日、子どもたちとともにもう一度、言葉の豊穡さを味わうためには、一人一人が立ち止まり、自分が発している言葉を観察してみることが必要ではないでしょうか。大人も子どもも、それぞれに、自分の言葉をいったん受け止めてみる。ときには、黙って持ちこたえること。その余白の中でこそ、言葉の力は育ちます。現代の速度とは異なる時間軸も念頭に置いて、言葉と向き合い、使い方のバランス感覚を見つけていくことが、いっそう大切になってきていると感じます。

SNSの急速な発達など、言葉の世界は加速度的に変化しています。そんな時代に、わたしたちは言葉とどう向き合っていけばいいのでしょうか。教科書編集委員会のお二人にうかがいました。

「これからの時代と言葉」 わたしたちは言葉に どう向き合っていくか？

言葉で子どもたちの心をつなごう。

加賀田 哲也
KAGATA Tetsuya
大阪教育大学教授

自分の思いや考えを表現する。自らの思考を深める。互いを理解し、人と人をつなぐ。よりよい社会関係を築く。言葉には、すばらしい力があります。これまでの外国語教育を振り返ってみると、言葉を学ぶということは、単語や文法を覚えることに結び付けられがちでした。しかし、子どもたちを育てるのが教育であるなら、最終的な目的は、言葉の力を通して他者を理解しながら、一人一人が豊かな自己を築いていくこと、人間形成であるべきだと思うのです。

「Great!」「Cool!」「Beautiful!」普段なかなか言えないまっすぐな言葉がするりと言えてしまうのが、英語の不思議なところ。一生懸命がんばっているのに、どうして他の子のようにいかないんだろう。そんなやるせなさを抱えている子どもたちの顔が、英語のもつ率直な表現に後押しされて、みるみる明るくなる。そうした場面を何度も見てきました。

多様な言葉を身につけるということは、多

様な自分と出会うということです。決して言語体系を完璧に理解しなくてもいい。挨拶一つでもかまいません。自分の中に小さな異文化をいくつも取り入れていくことが、子どもたちの世界を広げ、思考を深めていくうえで大きな力をもつと考えています。

とはいえ、見知らぬ言葉に触れることそのものを諦めてしまう子もいます。自己肯定感の低さゆえに、自分自身を表現することをためらっている子もいるはず。それでも、自分の好きなもの、自分が得意なこと、自分がやりたいこと……。子どもたち自身と言葉を粘り強く結び付けていくと、言葉が「自分事」になる。子どもたちからどんどん表現したいことが出てくるようになるのです。

誰もが心の中に伝えたい思いを抱えています。そうした、表現しきれない思いと言葉の間にはしごをかけること。子どもたちの心に灯をともすこと。それが私たちにできることなのだと思います。

2000年『いまにももうおっていく陣地』で第5回中原中也賞、
2006年『食うものは食われる夜』で第56回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。
主な著書に、絵本『うきわねこ』（ブロンズ新社）、文集『孔雀の羽の目がみてる』（白水社）、小説『転身』（集英社）など。光村図書小学校『国語』、小・中学校『書写』教科書編集委員。



人間教育としての英語教育、国際理解教育などを研究テーマとして
大学で教員養成に携わる他、小学校、中学校、高等学校などで英語授業改善のための
指導や教員研修に当たっている。光村図書小学校英語教科書『Here We Go!』、
中学校英語教科書『Here We Go! ENGLISH COURSE』編集委員。

これからの 『とことば』 探究テーマ

〔 AIと言葉 〕

これからの時代、避けては通れないのがAIとの協働ではないでしょうか。

AIを教育に活用していく中で、言葉の学びや人と人とのコミュニケーションの在り方がどう変わっていくのか。特に、生成AIとうまく付き合っていくための言葉の力とは何かを探っていきます。

〔 多様性と言葉 〕

学校の教室の中では、性別はもとより、母語やルーツ、障害の有無など、さまざまな特徴や特性をもった多様な子どもたちがともに学んでいます。

それぞれの違いをわかり合い、よりよい社会をつくっていくために、言葉はどんな役割をもっているのでしょうか。

〔 ARTと言葉 〕

美術や音楽、文学、書道、身体表現など、さまざまな芸術は、私たちの心や暮らしを豊かにしてくれます。

言葉に着目して芸術を捉えてみると、いろいろなおもしろさが見えてきます。芸術と言葉との関係性を掘り下げ、さらに豊かな世界を発見していきましょう。

〔 からだと言葉 〕

スポーツのコーチは、言葉によってアスリートの動きを的確にアドバイスしたり、モチベーションを上げたりします。

子どもの日常生活の中での動きにも、言葉との密接なつながりを見いだすことができます。子どもたちのからだに寄り添う言葉を考えていきたいと思います。

〔 風景と言葉 〕

雑草という名の草はありません。どの植物にも名前があります。虹の色は、日本などでは七色ですが、国によっては数が違うことも。

ふだん見慣れている風景も、名前や言葉、背景にある文化を知ること、いっそう輝きを増します。そう、世界は言葉でできているのです。

教科書づくりと言葉

光村図書の教科書の編集長が、教科書づくりで大切にしている言葉や子どもとの向き合い方について語ります。



国語と言葉

世界を広げ、世界とつながる。 言葉は、生きる力そのもの。

言葉の力は、言語生活全体を通して育まれていくものです。その一方で、学習を通して獲得する言葉も確かにあります。

まるで自分のことを語っているかのような詩歌や物語に出会うとき、ふと、「この世界のどこかには、私が今、誰にも言えずに抱えている思いを共有できる人がいるのかもしれない」と思い至る瞬間があります。世界の広さや可能性に気づかせ、勇気づけてくれるのは、言葉です。また、幾通りも解釈ができる懐の深い作品や、「こうも考えられるんじゃないか」と自分な

りに反論を考える余白のある文章からは、対話が生まれます。こうした対話を通して、自分の考えや気持ちを伝え、相手が伝えようとしていることを正しく理解する、確かで豊かな言葉の力が育まれていきます。

言葉を交わす中で自分自身を確立し、相手との関わりの中で自分を、あるいは友達のことを発見する。言葉には、自分の世界を広げ、世界と自分をつなぐ力があります。言葉には意味を伝える以上の力がある。そんな実感を積み重ね、言葉への信頼感、言葉の使い手としての責任感を育んでほしいと願います。

書写と言葉

自分らしい字で、思いを伝えてほしい。

すうっときて、「びたっ」。
「とめ・はね・はらい」など、文字を整えて「書く感覚」を、言葉で取り込むこと。それが文字を書くことの始まりです。文字を書き、文字に向き合うために、必要な言葉はほんのわずか。余分な言葉は、むしろ書くことへの集中を削いでしまいます。

気合いが入った文字。しょんぼりした小さな字。温かみのある字。文字は書き手の心とつながっているように感じます。整った字を書けるようになることが書写の目的ですが、文字はあくまで、思いや考えを人に

伝えるためのツールにすぎません。自分らしい字で、自分らしく思いを伝えられればいい。自分の字を好きになってくれば、もっといい。そうして子どもたちが、より生きやすくなってほしいと思っています。

人が生きることと書くことは、決して切り離せないものです。私たちが生きるこの時代に、文字を通して歴史や物語が、言葉が、受け継がれてきたこと。その裏にたくさんの書き手がいたこと。とてもおもしろくて、すてきなことだと思います。



美術と言葉

さらに世界を深めるもの。

ある中学校の授業を取材したときのことで。「思い出の風景を描く」という授業で、学校や家の周りの風景を描く生徒が多い中、その生徒は、熱心にこたつの絵を描いていました。つたない描き方で、画面一面をオレンジ色に塗っている。「どうしてこたつを描いているの」と尋ねてみました。「亡くなった大好きなおばあちゃんと、よく居間のこたつで過ごしていた。その温かい思い出を表現したくて……」と教えてくれました。それを聞いたとたん、胸が熱くなり、その絵がとても愛おしく感じられました。

生徒たちから、作品に込めた思いや考えを聞くと、その作品がどんどん魅力的に見えてくる。パッと見た

だけではわからない作品のよさを、言葉が連れてきてくれるのです。

鑑賞の授業でも、言葉の大切さを実感します。作品を観て、「きれい」「楽しそう」と発言していた生徒が、先生が「構図」という言葉を示したとたん、作品を分析するように鑑賞し始め、授業が盛り上がる。鑑賞を一步先へと深めてくれるのも言葉です。

美術では、言葉を使わずに、絵を描いて自分の思いを表現したり、違う言語を話す海外の作家の作品に心を震わせたりすることができます。それが美術のよさですが、言葉があると、さらにその先まで行ける。言葉によって、美術の世界が深められるんです。

英語と言葉

言葉と心が離れないように。

I've never seen such a beautiful sunset.(こんなにきれいな夕日、見たことないよ)

例えばこの言葉が、旅先で思わぬトラブルがあって、一件落着いた後に、ふとこぼれたひと言だとしたら、言葉から受け取る感じ方は変わってきませんか。気持ちが表れた言葉は、心に残ります。話し手の思いが腑に落ちると、一気に言葉そのもののまで好きになってしまうということがあるのだと思います。

I like your name.(あなたの名前が好きです／いい名前ですね)

自己紹介のシーンを描くなら、“My name is”とお互いの名前を伝え合うだけでもいいでしょう。でも、必須でない言葉だからこそ、“I like your name.”と言った子の優しさが心に残る。その子らしさが浮かび上がった

てくる。私たちは、そんな言葉を大切にしたいと思っています。

正しい言葉の使い方を学び、正確にメッセージを伝える。そうして円滑に社会生活を営んでいくためのツールを身につけることも、もちろん言葉を学ぶことの大きな意義です。一方で、言葉に触れることそのものが与えてくれる喜びや楽しさ、悲しさ、さまざまな感情も、同じくらい重要なものではないでしょうか。

言葉には、人を動かす力があります。言葉に、間違えずに正しく伝える、ということ以上の想いを込めてみる。子どもたちに手渡す言葉と心とを離さないようにする。教科書のつくり手としてのそんな願いが、子どもたちにとって、何か大きな意味をもたらすこともあるのではないか。そう信じています。



生活と言葉

体験の、その先に。

自分で決め、自分なりにやってみる。体験をして、心が動く。その後に、言葉が続く。これらを繰り返し、毎日、新しい自分に、新しい気持ちに出会うのが、生活科の学びであると考えています。

ただ、体験とは難しいことだとも感じています。例えば、泥だんごづくり。低学年の子どもたちは、自分なりの理想をもって、さっさと泥だんごをつくり始めます。それが、大学の授業になると、学生は泥にさわる前に、まずつくり方のこつを尋ねるのだそうです。年齢を重ねるにつれ、失敗が許されなくなってしまうからかもしれません。

でも本当は、体験しながら更新される理想に向かって、立ち止まったり、失敗したり、友達と学び合ったり

しながら、自己決定や意思選択を続けていく。そしてそこで見つけた自分の解に、納得することが大切なのではないでしょうか。だからこそ、感じたことや考えたことが言葉となって湧き出てくるのではないのでしょうか。時には、予想とかけ離れた現実に出くわし、落ち込むことがあるかもしれませんが、でも、その機会を奪わないことが、自分自身を体得することにつながるのではないかなと思うのです。

生活科には、世の中をおもしろがる、体験の入口がたくさんあります。体験から経験を重ね、子どもたちがさらに心を耕し、自分の言葉を紡げる人になれるよう、その入口を今日も模索したいと思います。

道徳と言葉

言葉になる前の、一人一人の頭の中にこそ。

「これからの時代、多様な他者とわかり合うことが大切です」。そうは言っても、どれだけ話し合ってもわかり合えない人もきっといます。でも、話し合うことをやめてしまったら、争いはなくなならない。だから私たちは対話が続けていかなくてはいけないし、子どもたちにも、対話することを諦めずにいてほしい。そう願っています。

例えば小学校で扱う「親切」というテーマ。自分にとっての親切と、友達にとっての親切は違うということ。親切にするには勇気があること。気持ちがささくれているときは、親切にできないときもあること。子どもたちは対話を通して他者を、そして自分を理解していきます。

自分が問われるからこそ、言葉に詰まってしまう場面もあるでしょう。決してすっきりとした答えが見つかるわけではない。でも、子どもたちの頭の中では、たくさん考えが動いています。そうした「言葉にならない言葉」まで、丸ごと大切にあげたい。

子どもたちは、教室の中での人間関係をとてもよくわかっていて、授業の中で先生が欲しい言葉も知っています。その中で本心をさらけ出すのは、とても難しい。大人も子どももいっしょになって、本気で悩み、意見を交わす。ぼろりと出てきた本音が、教室の空気を変える。そんな授業を思い描いて、そこにあるだけで、思わず話してしまいたくなるような対話の「種」を探し続けています。



「言葉の時代」は終わらない。

心を伝える。感性が豊かに響く。理性をしっかり構築する。

AIの主人となる。国境を、人種を、文化を、軽々と超えていく。

すべては、言葉が成し遂げる。「生きる」のふもとに言葉がある。

私たちは、光村。言葉の力を紡ぐ者。

力ある言葉を、あらゆる面から追究し、届け、

それがまた次の世代へと受け継がれるようにと願って、

終わることのない言葉の時代を切り拓いていく。

光村図書は、1949年の創業時から

教育・出版事業に強い使命感をもって、全力で突き進んできました。

80年近い歳月を経て、デジタル化、AI化、国際的なシームレス化など、

いま社会は大きな変容期を迎えています。

光村図書は、人と人をつなぐ最も優れた手段である「言葉」の力を誰よりも信じてきました。

これこそが、これまでも、そしてこれからも変わらない光村図書のDNAです。

時代が変わっても、言葉のもつ力は変わりません。

むしろ、正しく美しく力ある言葉を自在に使っていくことが、より求められていくでしょう。

これからも光村図書は、終わることのない「言葉の時代」を切り拓いていきます。

竹紙って？

この冊子は、
国産竹を100%原料とした
「竹紙」に印刷しています。



かつて竹は、かごなどの生活用品を作るうえでとても重要な資源として各地で栽培されてきましたが、近年はプラスチックなどの代替材料にとって代わられてきました。そのため、あちこちで竹林が活用されずに放置されるようになり、隣接する森林や里山が侵食され、生態系が崩れて生物の多様性が低下するということが日本全国で起きています。

竹林が多い鹿児島県薩摩川内市に製紙工場がある中越パルプ工業(株)は、竹林整備で伐採されても使い道がなく処分にかかる竹を、1998年から製紙原料に活用しています。

竹は木材に比べて成長は早いのですが、硬い、空洞部分が多いなど、製紙原料としては効率が悪く、日本の製紙会社では使われていませんでした。しかし、日本の竹を活用することは日本の環境に寄与することから、積極的な活用を進め、2009年には国産竹を100%原料とした紙「竹紙100」が誕生しました。



森林や里山の保全再生、生物多様性の保全に役立つとともに、竹に新たな価値を生み出し、地域経済にも貢献できる竹紙を『とことば』では積極的に活用していきたいと思っています。ぜひその風合いとともに、竹紙の“すごさ”を感じてください。



光村図書ウェブサイト

光村図書

検索



小・中・高等学校
教科書訂正のお知らせ



光村図書
LINE公式アカウント
友だち募集中!



とことば
tokotoba

0号

2025年4月15日発行

発行者 ● 吉田直樹

発行所 ● 光村図書出版株式会社

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9

電話 ● 03-3493-2111

www.mitsumura-tosho.co.jp

デザイン ● 深山貴世 (ZONOCO)

イラスト ● おおの麻里

制作協力 ● 株式会社パラドックス

印刷所 ● 協和オフセット印刷株式会社

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。
詳しくは、光村図書ウェブサイトをご覧ください。

教育情報誌に関するお問い合わせ先
住所変更・配送停止 ▶ ej1@mitsumura-tosho.co.jp
ご意見・ご感想 ▶ koho@mitsumura-tosho.co.jp